

記」といった状態となった。

京都へやって来た大友氏の使者の弁解では、「大内盛見が無理をしたのでこういうことになったのです。大友方から仕懸けたことではありません。これからのことは上裁に任せます。筑前国で前々より知行してきた所々を知行することだけで、そのほかのことは考えていません」というものであった。筑前国では、さすがの大内氏も、基盤がなく、地域的領主化を進めていた国人たちの反発に遭って、孤立してしまいう弱さを露呈したのである。結局、豊前・筑前は従来どおり大内氏が支配し、大友氏は筑前国の所領を元のように知行するということになった。

三 大内持世の北九州平定

大内持世・ 永享三年（一四三二）六月、大内盛見が不慮の死を遂げたあと、盛見に嗣子が決めてなく、

持盛の争い 義弘の子である孫太郎持盛と九郎持世が家督の座をめぐる争乱し、そのため、分国が大いに動揺した。

幕府は御料国代官を自刃に追い込んだ大友持直を討伐することに決し、持直とかねてから不仲である大友親綱・同親隆、菊池氏、安芸・石見の国人に出陣を命じた。菊池持朝には筑後国守護職を与えた。

大内家督については、大内盛見が足利義持へ許可を求めていたのは、在京の大内氏代官内藤入道智得の申し入れによると、兄の持世へ長門・豊前・筑前の三か国を、弟の新介持盛へ周防国と安芸国東西条、満弘の

子満世へ長門国内の一郡と石見国二万郡にまを与えるというものであった。

ところが、足利義持の弟である新公方義教は、義持の内諾を覆し、兄の持世を大内惣領とし、持盛へ長門国以下を与えることにした。

大内持世は、早速、豊前・筑前の奪回に乗り出した。

筑前国では、旧分国の打ち渡しを拒む少弐氏の強い抵抗を受け、豊前国では、企救郡で、大友持直の舍弟掃部頭親雄および一族の狭間氏が籠城して抵抗し、毎日合戦を繰り返した。筑後国では、菊池氏が入国してきたため、大友持直は少弐氏と連合して大内・菊池勢と戦った。



大友持直の花押

永享四年（一四三三）二月、公方義教の家督決定に不満な大内持盛は、持世方へ夜襲をかけ、惣領の座を奪う行動を起こした。大内持世は、わずか五〇騎ほどで山口を落ち、長門国樺へ逃れ、石見国境付近へ籠城し、後、石見国三隅城みすみへ移った。大内持盛は豊前国を奪回して、朽網から周防国へ帰った。大友持直が大内持盛を支援していたらしい。

この事態に対して、京都では「遠国の事は、少々上意のようにならなくても赦しておくことは、当御代ばかりではなく、尊氏以来のやり方である。持盛に大内家督を認めようではないか」という意見も出てきた。

ところが、幕府の支援を得た持世が、石見・安芸の軍勢とともに、山口に侵入し、持盛を豊前へ敗走させた。

幕府は、大友持直との衝突を避けるためか、大内持世が豊前へ渡ることを禁じ、持盛へ与えられていた長門国と安芸国東西条などを持世へ与えた。大内持盛は、幕府が危惧していたように、大友持直と結び、防長への帰国の機会をねらった。京都では、大内持盛が防長へ渡海したときには、豊後の日田・田原・佐伯らの幕府奉公衆や大友親綱を大内持世へ加勢させることにした。半年後、九州渡海の許可を得た大内持世は、安芸・石見・伊予三か国の国人の支援を得、筑後守護職を得た菊池持朝、豊後守護職を得た大友左京亮親綱の支援をも受けて、永享五年（一四三三）四月、豊前国篠崎（小倉北区）の合戦で、大内持盛を打ち滅ぼした。

大内持世と大

同年八月、筑前国に侵入した大内持世勢は、備後・安芸・石見勢の応援を得て、少弐満

友持直の戦い

貞・大友持直勢と戦い、少弐氏の拠る三岳（豊前香春二ノ岳カ）を備後守護代犬橋某の突入

によって攻め落とし、更に大友親雄の拠る秋月城を攻めて、少弐満貞（四十歳）父子三人などをはじめとして数百人を討ち取った。大友親雄は夜の闇に乗じて逃亡した（『満濟准后日記』）。

大友持直は、十月三日、妻子を具して府内から乗船し、行方不明

となった。佐伯・臼杵方面へ難を避けたいらしい。大友親重（のち親

繁）も日向へ亡命した。

十二月十五日、大友持直は、国人たちに呼び戻されて帰国した。

親綱の父親著も一緒だった。このため、大友親綱は豊前国へ逃亡し

た。

幕府が補任した守護親綱に国人たちが従わなかったのである。このようなことは安芸国でも起こっていた。



大内持世の花押

幕府は再び安芸・石見・伊予の国人に命じて大内持世を加勢せしめ、大友持直を討たせることにした。

永享六年（一四三四）正月、九州探題渋川満直は少弐満貞の弟横岳頼房と戦い、討ち死にした。大内持世は、渋川満直の子万寿丸（十三歳）を探題に推挙し、教直と称した。こうして、大友・少弐・菊池兼朝勢と、大内持世・渋川教直・大友親綱・菊池持朝勢とが果てしなく合戦を繰り返した。

鞍持の合戦

永享六年九月六日、麻生上総介家春や小早川又太郎熙平が、大内持世に従って、鞍持において大友・少弐勢と合戦した。

鞍持の地名は、筑前国怡土郡（前原市）にもあり、犀川町の鞍持山と特定することはできないが、鞍持山と考えたい。『太宰管内志』は、蔵持山について、「古は坊中九十六坊ありしと云、今十八坊あり、法頭を城台坊といふ、二月十五日に松会あり、山内に宇都宮氏五坊と云物あり、城台坊・真蔵坊・宝泉坊・梅本坊・中之坊是也、上宮より四方十八町は山領なり」と記し、天台宗彦山の末流で、中世、修験道が盛んで、宇都宮氏も一族の者を遣わして、この山を統制し、城砦の一つとしたらしい。

この山の講堂の向かいに北山殿があり、北山に行く所に、五輪の塔が多くあり、この奥には更に多くの五輪塔があるという。修験者たちの墓塔のみではなく、戦死した武士たちの墓ではなからうか。

『看聞御記』によると、このころ、九州は少弐嘉頼・大友持直によって一統し、大内持世が討ち死にするのは必定であり、大内持盛の子（教幸カ）を家督としたという噂が京都で流れた。

豊前国仲津郡内元永の事、領知相違有るべからず候、伊方の事は、当知行人ニ宛行う、代所を追て申し談ずべく候、いささかも、等閑有るべからず候、恐々謹言

二月十六日

佐田因幡守殿(盛徳)

(大友親綱の弟)
直親(花押)

これは、大友氏が豊前国を支配していたころ、佐田盛景の所領元永を安堵し、伊方庄は他人に与えたので代所を与えることを約束したものである。直親は大友氏の豊前国代官であろうか。

姫岳の合戦

永享七年(一四三五)六月、豊後府内から船出して行方不明となっていた大友持直は、白杵・津久見堺の姫岳(標高六二〇ト)に立てこもっていた。これを討伐しよう幕府の命令を受けた大内持世・河野通久・大友親綱ら、中国・四国・豊筑の軍勢が包囲攻撃したが、地の利に明るい豊後南部の国人に守られた大友持直は奥地に誘い込んで反撃し大勝利を得た。伊予の守護河野通久を戦死させ、大内軍を敗走させた。

姫岳の攻防戦は、翌永享八年六月、城内の武士に対し、同族から調略を行わせ、通謀するものが出て、城は焼き払われ、大友持直は城を捨て、豊後奥地へ姿を消した。大友持直は、このあと、嘉吉の変に乗じて、対馬から筑前に侵入した少弐嘉頼や大内教幸らと拳兵するが、昔日の勢いはなかった。

九州平定に功を致した大内持世は、嘉吉元年(二四四二)六月二十四日、公方義教に陪従して赤松満祐邸を訪れた。宴の席上で義教は満祐に斬殺され、持世も凶刃に遭って重傷を負い、七月二十八日絶命した。嘉吉の変という。